完璧な病室

小川洋子

yōko ogawa

完璧な病室

小川洋子

福武書店

小川洋子（おがわ　ようこ）
一九六二年、岡山県に生まれる。早稲田大学文芸科卒業。八八年、「揚羽蝶が壊れる時」で第七回「海燕」新人文学賞を受賞。八九年、受賞第一作の「完璧な病室」が第一〇一回芥川賞候補作となる。

完璧な病室

一九八九年九月一一日　第一刷印刷
一九八九年九月一五日　第一刷発行

著者　小川洋子
発行者　福武總一郎
発行所　株式会社　福武書店
東京都千代田区九段南二―三―二八
〒一〇二　電話（〇三）二三〇―二一三一
振替口座（東京）六―一〇五〇九七

本文印刷　大日本印刷
平版印刷　栗田印刷
製本所　加藤製本

（落・乱丁本はお取替え致します）
（定価はカバーに表示してあります）

©Y. Ogawa 1989
ISBN4-8288-2311-5 C0093
NDC913 196 192p

目次

完璧な病室　5
揚羽蝶が壊れる時　103

装幀　岩佐なを

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongb

完璧な病室

完璧な病室

弟のことを考える時、わたしの胸は石榴が割けたような痛みを感じる。なぜだろう。それはたぶん、わたしたちが二人きりの姉弟で、両親の愛情にあまり恵まれなかったからだろう。そして弟が、信じられないくらいの若さで、死んでしまったからだろうと思う。誰だって、二十一の青年の死を容易に想像することなんてできないだろう。二十一といえば、人間が一番死と無関係でいられる時だ。

だから、弟はわたしにとってあまりにもいとおしい存在なのだ。このいとおしい気持ちというのは、わたしが他のどんな人間に対しても持ったことのない種類の気持ちだ。父にも、母にも、夫にも、そして自分自身に対してもだ。

何かささいないざこざで気分が沈んだ時、わたしは弟と過ごした安らかな時間のことを思い出す。晩秋のしなやかな風が、レースのカーテンをすりぬけて、弟のベッドをなでている。弟は腰の後ろに羽まくらをあてて上半身を起こし、わたしに横顔を見せている。わたしは、ベッドの脇のソファーにゆったりと腰掛けて、弟の横顔を見ている。点滴のしずくの音が聞こえそうなくらい静かな午後だ。そして病室は、すべてがきちんと清潔に保たれている。床やユニットバスのホーローは丁寧に磨き込んであるし、シーツには程よく糊がきいて染み一つない。わたしたちは、いろいろな問題について話をしている。プロ野球の日本シリーズの結果について、ソ連のペレストロイカについて、アボカドの調理法について。あるいは、哀れみについて、苦しみについて。弟の声が、薄いベールになってわたしを包んでいる。しゃべり疲れると、二人は好きなだけ沈黙を抱えてそれを温めている。弟の横顔の輪郭は、軟体動物の体表面のように神秘的に透き通っている。わたしの心を乱すものは何もない。完璧な土曜日だ。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongb

弟はいつでも、この完璧な土曜日の記憶の中にいる。ガラス細工のように精巧な弟の輪郭を、今でもはっきりと思い出すことができる。

わたしはまだ、こんなふうに記憶の中だけで弟に会うことに、慣れていない。その時にこみあげてくるいとおしさの塊をどう扱ったらいいのか、よくわからない。淀んだ血液が絡み合い固まっていくように、肋骨の裏あたりでいとおしさの塊がどんどん大きくなってゆく。するとわたしは、それがボンと破裂してしまわないように、じっと息を静める。そしてただ泣いている。もっとじょうずに弟を忘れることができたらいいのに、と願いながら、安らかな病室の記憶に浸っている。

わたしは、何時間も何時間も弟のことを考えて過ごしている。こんなにも長い時間、弟のことを考えるなんて、今までなかったことだ。病にとりつかれる前の弟は、弟というかっちりした枠の中で数学の定義のように存在していて、それ以上何も考える必要などなかった。彼が瀬戸内の小さな町の大学に行ってしまってからは、特にそうだった。ところが、彼がわたしに救いの電話をかけてきた時から、その関係

がゆるやかに変形しはじめたように思う。

「近所の医者が、大きい病院で治療したほうがいいって言うんだ。姉さんの勤めてる大学病院、紹介してもらえないかなあ。」

それはひどく、申し訳なさそうな言い方だった。この申し訳なさが、病気の心配以上にわたしをせつない気分にした。おまけに弟はささいな事柄ばかりを気にかけていた。冷蔵庫に残った卵やケチャップのこと、更新したばかりのスイミングクラブの会員券のこと、ゼミの教授に頼まれた文献整理のこと。そんな日常的で、いくらでも取り返しのつくような種類の問題だ。病気、休学、帰京、闘病生活、これらの重大でしかも突然の重荷を、弟は冷蔵庫の中身をゴミ袋に捨てるように、サラリとやりすごすことができたら、と思っていたのだろうか。

いずれにしても、弟はもういない。わたしはこの事実を何回も確認させられた。大学から授業料滞納の通知が届いた時、弟のパジャマを洗濯してアイロンをかけてクローゼットの奥にしまった時、弟のいた病室の扉に別の名札が差し込まれている

のを見た時。そのたびにわたしは、「もうわかった。わかったから、そっとしておいて。」とつぶやいた。

弟はあの病室のあのベッドの上で、いつでも完璧に穏やかで、完璧に優しかった。弟の首筋は完璧に滑らかで、弟の吐く息は完璧に透明だった。だからよけいに、哀しい。わたしは発作に襲われるように、何度も何度も繰り返し、哀しんでいる。

弟が東京に帰ってきた日は、文句のつけようがないほどの秋晴れだった。街全体が薄く透き通ったガラスに包まれたようだった。

午前中の診察が終わって人影が少なくなった新患受付のソファーで、わたしは弟が来るのを待った。わたしのそばを沢山の種類の人間が通り過ぎていった。ワゴンを押して洗濯場にシーツを運ぶ看護助手の足元や、レセプトを抱えて立ち話をしている女子職員の胸元や、インフォメーションのカウンターで院内電話番号簿をめくっている受付嬢の指先などを、ぼんやりと眺めていた。どれも見慣れた風景だった。

顔見知りの病理学教室の研究補助員がわたしに気づいて、「なぜこんなところにいるの。」と話しかけてきたが、いろいろな事情について説明するのが面倒だったので、あいまいに微笑むだけで何も答えなかった。

正面の入口の自動扉が開くと、清らかな秋の空気がほんの少しだけすべりこんできた。そのたびに、視線を上げて弟を探した。弟はなかなか現われなかった。わたしは何度も、新幹線のホームから大学病院までの道のりを頭の中に描きながら、腕時計の針を目で動かした。もう、いつ到着してもおかしくない時間のように思えた。

弟が瀬戸内の小さな町の病院で受けた診察のデータは、もうすでにわたしから、わたしのボスである消化器外科の教授に渡り、次に血液内科の教授へ、更に主治医となるS医師の元へ送られていた。その間にさまざまな特殊な検査の予約がなされ、十五階西病棟の個室が用意された。これらの事務的な手続きが一つの無駄もなくスムーズに流れていくのを、わたしは何の手出しもできず、ただじっと眺めているしかなかった。弟の病気を受け入れる準備は、完璧すぎるほど整っていた。

会計と薬剤部のマイクロフォンから、患者に順番を知らせるアナウンスが絶え間なく流れていた。まず苗字だけを少し尻上がりにコールして、それからフルネームを告げる。何十秒かたって本人が現われないと、また同じイントネーションで繰り返す。そのリズムは波のように狂いがなかった。かわいらしい名前、柔らかい名前、強固な名前、慎ましい名前。いろいろな名前があった。名前のイメージから病気の種類を想像してみた。どの名前にも、ぴったりの病気を思い浮かべることができた。それぞれみんな病気なのだ、とわたしは思った。

弟に最後に会ったのは、去年の夏、母親の一周忌の時だった。それはとてもささやかな一周忌だった。武蔵野の林に囲まれたこぢんまりしたお寺で、せみの声が何重にも渦を巻いていた。弟とわたしとわたしの夫の三人は、その渦の目の中にぽつんと正座して、長い時間お経を聞いていた。その後、わたしたちはまるでせみの声に鼓膜を吸い取られたかのように、無口にお寺の精進料理を食べた。そして弟は、そのまま直接、お寺から大学へ帰ってしまった。だから、弟と何かをきちんと話し

たのは、もうずいぶん前のような気がした。というよりも、お互い大人になってから二人でゆっくり語り合ったような場面を、わたしは一つも思い出すことができなかった。

新患受付、再来受付、会計、薬剤部とコの字形に続くカウンターの向こう側では、白衣姿の職員たちがくるくると動き回っていた。カウンターに向かって右手側にある、床から天井まで届く大きな窓ガラスから、丁寧に手入れされた中庭が一点の曇りもなく見えた。整備課のおじさんがフランスパンの切れ端を細かくちぎって、池のアヒルに投げていた。わたしは白衣のポケットに両手を突っ込んで、ゆっくり立ち上がった。ポケットの中で消しゴムやクリップやしわくちゃになった教授からのメモが、がさがさ音をたてた。ソファーの間を縫ってロビーの端まで歩いて、右肩で窓ガラスにもたれかかった。中庭の明るさが顔の右半分を包んでとても暖かく、うたた寝しているように気持ちよかった。アヒルは水面のパン屑を嘴ですくっていた。おじさんのフランスパンはもうかなり小さくなっていた。おじさんは、それを

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongb